

令和5年 5月 8日

学校名 鈴鹿市立河曲小学校

学校長名 中野 誉

令和5年度 校内研修実施計画書

1 研究主題及び教科

研究主題	考えることを楽しみ、学び続ける子の育成 ～ 一人ひとりが自分の考えをもち、伝え合い、学び合う授業を通して ～
教科・領域	算数科・全領域

2 主題設定の理由

(1) 学校教育目標と児童の実態について

本校では、学校教育目標「自ら学び、ともに社会をつくろうとする子どもの育成」のもと、「自ら学び、協働して課題を解決する子」「違いを認め合い、人の気持ちをわかろうとする子」「健康で安全な生活を心がけ、自ら体を鍛える子」をめざす子ども像とし、日々の教育活動を進めている。

三世代が同居する家庭に育ち、ゆったりとした生活を送っている子や、様々な事情で家庭的に寂しい思いをしながら生活している子、また外国にルーツをもつ子など、生活経験や生活背景の異なる多様な子どもたちが共に学習している。子どもたちは、素直で明るく、与えられた問題に対して真面目にコツコツと努力することができる。また、困っている子には手助けができ、周りのなかまに思いやりの気持ちをもって接することができる子も多い。

一方で、自力解決等で、自分の考えをもてる児童は増えてきたが、全体討議で自分の考えを説明したり、友達の考えと自分の考えを比較しながら聞いたりする力に課題があることが見えてきた。また、全国学力・学習状況調査やみえスタディ・チェックの結果からも、他者の考えを活用し、図や式、言葉を使って表現するような記述式問題の正答率が低く、説明する力に課題があることがわかった。さらに、個々の児童の学力差が大きいため、授業後半になる程、低学力の児童が授業についていけず、理解を深められない課題も見えてきた。

これらの課題は、特に算数科において顕著にみられ、授業改善を進める必要があると感じた。そこで、今年度も昨年度に引き続き、「算数科」を研究の中心教科に位置づけ、実践交流を進めることにした。

子どもが主体的に問題と向き合い、学んだことを活かしてさらに深く算数を追求しようとする姿をめざしたい。教材提示の工夫や学習形態の工夫（少人数指導と習熟度別学習）により、算数の学習に苦手意識を持っていた子どもが、前向きに学習に取り組めるようにもしたい。また、内容の系統性や学習の連続性が明確であるという算数科の特性をもとに、教師集団が自らの考えや指導方法を交流することも目指したい。学習課題を自らの「問題」とし、解決にむかって動き出

そうとするような導入の工夫を行うことで、子どもの姿も少しずつ変化していくだろう。

令和4年度は、研究主題を「考えることを楽しみ、学び続ける子の育成～一人ひとりが自分の考えをもち、伝え合い、学び合う授業を通して～」とし、研究を進めた。副主題を「一人ひとりが自分の考えをもち、伝え合い、学び合う授業を通して」としたことで、子ども同士が自分の考えを伝え合い、学び合える授業づくりをめざした。自力解決の時間を十分確保したり、ペア学習やグループ学習を取り入れたりしたことで、児童一人ひとりが自分の考えをもてるようになってきた。また、考えを図に表しながら問題を解決したい、いろいろな方法で考えたいという児童の姿が見られるようになってきた。その反面、「考えをもっている、筋道を立てて、自分の言葉でわかりやすく相手に伝えられない」「自分の考えを順序良く表現することができない」「友達の考えと自分の考えを比較しながら聴くことができない」「すぐにあきらめてしまい、粘り強く最後まで取り組むことができない」という児童の弱みが明らかになった。児童が粘り強く学習に取り組んだり、主体的に学習に取り組んだりするためには、解くことの楽しさや達成感を感じて、学ぶ楽しさを味わう経験を重ねることが必要である。そのためには自分の考えを表現し伝え合い、仲間とともに学びを深めていくことがとても重要であると考え。伝え合うこととは、「わからないことをわからないと伝える」ことや、「ここまでは理解できたが、ここからが理解できないと伝える」こと、「友達の考えと自分の考えを比べながら聴く」ことも含んでいると考えたい。ともに学び合うためには伝え合う活動が大きな柱となってくる。そしてこれらの力は、自然に身に付くものではなく、個々に力を伸ばしていけるものでもない。お互いの力が深く関わり合って作用して伸びていく力であると考え。そのためには一人ひとりが認められている学級づくりをめざしていくことも重要になってくる。また、算数用語を使って論理的に説明することにも課題が見られた。

同時に、次のことが教師の課題として明らかになってきた。

- ・「教師の出場について。(どこまで与え、どこまで考えさせるか。)
- ・授業の核心やまとめの部分を教師が教師の言葉でまとめがち。
- ・基礎基本の徹底を図ろうとすると教師が引張る授業に陥りがちである。
- ・つまずきを克服する指導をしっかりと持つこと。
- ・タイムマネジメント(振り返りの時間がとれない授業が多い。時間配分を)
- ・つまずきの事前把握

授業者の課題としては、子どもの姿をしっかりとつかむことが必要であると考え。つまずき方は様々であるが、そのきっかけとなる単元、あるいは既習学習とのつながり等については、教材研究の段階で確実に把握することが必要である。また、レディネステスト(寺子屋の準備プリント)を活用していくことも必要と考える。その授業は全員の子にとって取り組みやすい課題になっているかどうか、一人ひとりの子どもを把握しているかどうか、子どもの実態に合った発問になっているかなどを考えて研修に取り組んでいきたい。

上記のことを踏まえて、本年度も研究主題を「考えることを楽しみ、学び続ける子の育成～一人ひとりが自分の考えをもち、伝え合い、学び合う授業を通して～」として、算数科を中心に研修を進めたい。ペアやグループ等、少人数での学習形態を取り入れ、ペア・グループ学習を活性化し、伝え合い、学び合う活動を通して、上記の課題改善をめざしていきたい。ペア・グループ学習の中で、伝え合い、学びあう場を設定し、低学力の児童のわからない等の困り感を明らかにし、その困り感を共有することで、協同的な学習につなげていきたい。また、全体討議でも、わからない等の困り感をもとに、それぞれのグループの考えをつなげていくことで解決方法に導いていけるような授業展開にすることで、児童の考えを深めていきたい。そして、単元や学年の実態に応じて、「よりはやく、より簡単に、より正確に、どんなときでも使える」ような、よりよい考えを導く過程を通して、主体的、対話的で深い学びにつなげていきたい。

(2) 学習指導要領との関わり

学習指導要領では、子どもたちに育みたい資質・能力が次のように示されている。

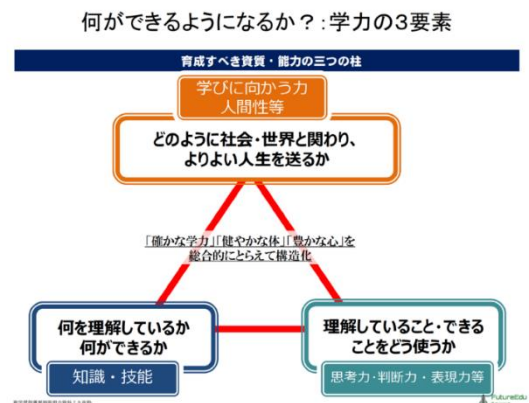
「生きて働く知識・技能の習得」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力の育成」「学びを人生や社会にいかそうとする学びに向かう力、人間性等の涵養」の3点が挙げられている。また、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善をおこなうこととし、児童が各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方（以下「見方・考え方」という。）を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見出して解決策を考えたり、思いや考えをもとに創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図ること。（学習指導要領 p22）

これらについて、本校が「考えることを楽しみ、学び続ける子の育成」という研究主題のもとで進めてきた、主体的な学びにつながる授業の導入の工夫や学習課題の設定、さまざまな考えを出しあう中で学びを広げ・深める学習活動の追及などは、学習指導要領の示す事項と方向を同じにするものであると考える。そして、下記（3）において、これまでの研究をもとにして設定した研究主題においても同様であると考える。具体的な実践を通して、本校児童の実態を踏まえた学習指導要領の具現化への方策を吟味・検討していきたい。

(3) 今年度の研究主題について

上記（1）（2）を踏まえ、今年度の研究主題を「考えることを楽しみ、学び続ける子の育成～一人ひとりが自分の考えを持ち、伝え合い、学び合う授業を通して～」とする。「考えることを楽しみ」は、学習課題の設定、学習形態の吟味、数学的活動の充実について研究することである。「学び続ける子」については、子どもの主体性や自ら学ぶ姿勢、そして学びを支えるなかまづくり、学習環境の整備と充実について追求することである。

副主題として掲げた、「伝え合い、学び合う授業を通して」は、指導者が授業と子どもを、あるいは子どもと子どもをどうつなぐか、思考力・判断力・表現力をいかに育むかということなどを研究することである。そして、算数科の研究を通して培った「学びに向かう力」を、教科を超えて学習活動全体へと波及することを意識して研究を進めていきたい。



仮説③ 授業の参観・交流・助言

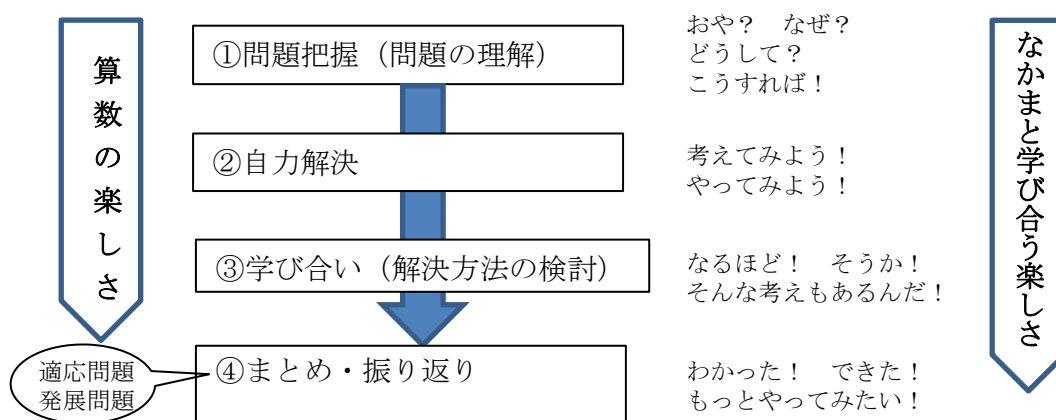
授業改善を進めるためには、個々の取り組み意識を向上させる必要がある。また、チーム河曲として「いつでも」「何でも」相談しあえる学年部づくりを進め、教材研究や児童理解を多角的な視点で行い、授業を参観する回数を増やし、多くの指導方法にふれあい、自らの支援・指導に活かしていきたい。仲間や外部講師からの具体的な助言や指摘を受け止め、自らの指導癖や教師としての姿勢を常に問い直し、互いに高めあえる教師集団づくりを進めながら、子どもたちの学びを確かなものにしていきたい。

(2) 研究主題に迫るために大切にしたいこと

1 「学び合う」授業づくり

① かわの算数授業プラン

「問題把握（つかむ）」「自力解決（やってみる）」「学び合い（広げる・深める）」「まとめ・振り返り（自覚する）」の学習過程の流れをベースにして「学び合う」授業づくりを進めていく。

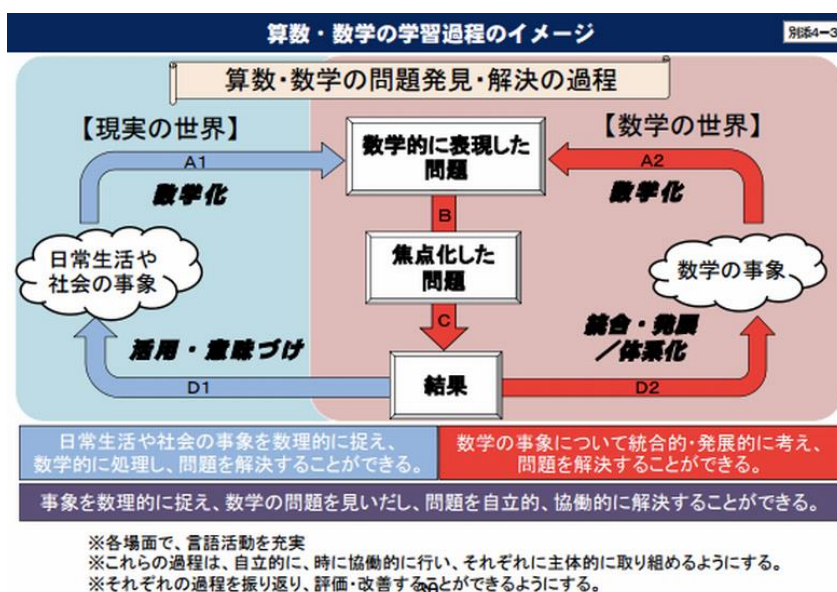


	学習活動	留意点
つかむ	【問題把握 (問題の理解)】 【課題提示】 本時の問題・課題をつかむ 学習の見通しをもつ	<ul style="list-style-type: none"> 意見のずれや問いを引き出せるような、教材提示の仕方を考える。 必要に応じて既習事項を使って、解決に見通しをもたせる。
広げる・深める	【自力解決】 自分の考えをもつ 【学び合い (解決方法の検討)】 【集団解決・全体討議】 問いを共有する 考えを共有する よりよい考え方を精選する	<ul style="list-style-type: none"> 自分の考えを言葉だけでなく、数、式、図などを用いて表現させるなど、学年に応じた数学的活動を取り入れる。 個別指導の際に、各児童の問いや考え方のずれを把握する。 必要に応じて全体で共有させたり、仲間が考えた式の説明をさせたりする等して、伝え合う目的をより具体的にする。 目的に応じて交流活動の形態を工夫する。
自覚する	【まとめ・振り返り】 課題に応じたまとめを行う	<ul style="list-style-type: none"> 課題に応じたまとめを書かせる。必要に応じて「適応問題を解く」「キーワードを使って分かったことをまとめる」など、条件を与える。

算数科一単位時間の学習過程は上記のようになる。この形式が全てではなく、子どもの様子や題材によって臨機応変に指導を進めたい。形式にとらわれ過ぎず、子どもの「考えたい」「伝えたい」「仲間の考えを聞いてみたい。」というような思いがより引き出せるような授業展開を

心掛けたい。

【参考：学習指導要領が示す，算数・数学の学習過程】



② 本校のとらえている学び合いとは

本校における，学び合いの姿を以下のように設定することとする。

子どもたち一人ひとりが，相手の考えを受け入れたり，自分の考えを見直して考えを深めたり，新たな視点で考えて答えや解決への道筋を見出したりするなどの姿。

ペア・グループ活動は，どのような目的で，いつ，どれくらいの時間取り入れるのか，考える必要がある。適した場面で活用することで，有効な働きをするだろう。また，仲間との関わりの中で，お互いの考えを交流させ，聴いて考えて伝え合うことで，考えをつくったり考えが広がり深まったりして，自分や仲間の進歩を実感できる授業と考える。

2 ICT 機器の活用

クロームブック端末，電子黒板機能付きプロジェクター，実物投影機器等，ICT 機器を活用することで，視覚的に理解を深めさせたり，伝え合い・学び合う場面を活性化したりすることで，児童の主体的な学びを促進し，子どもたち一人一人の個性に合わせた教育の実現をめざしていく。特に，1人1台のクロームブック端末の「ミライシードのオクリンク」「Google Jamboard」等を効果的に活用することで，児童が自らの考えをもつとともに，ペアやグループによる活動を通して，互いの考えを伝え合い，学び合うことができる授業づくりをめざし，協働的な学びにつなげていく。

「ミライシード オクリンク」「Google Jamboard」の長所の1つ目は，ペنツールやテキスト入力等で，児童が容易に繰り返し書いたり，消したりすることができる場所である。試行錯誤しながら解決方法を見つけることで，児童に思考力，表現力を育ませたい。長所の2つ目は，自分の考え（ワークシート）を指導者や他の児童に，瞬時に送ることができたり，ワークシートを他の児童と共同作業・同時編集することができたりする場所である。ペア学習を取り入れ，相談しながら考えの見通しをもたせたり，お互いの考えを説明し合わせたり，自分たちの考えを比較させたりすることで，図を見せ合いながら友達と考えを交流させ，個々の児童の学びを深めていく。特に，自分たちの考えを比較する活動では，それぞれの考えの共通点や相違点について考えさせることで，全体討議（それぞれの考え方や式を比較し，検討する活動）につなげ，児童の考えを共有したり，広げたりしていきたい。長所の3つ目は，簡単にワークシートを複製できる場所である。1つ目の考えをもてた児童には，複製されたワークシートを使って，2つ目，3つ目，・・・と多様な考え方をもちだせる。長所の4つ目は，オクリンクのLIVE モニタリング機能等を使って，指導者は机間指導しなくても，指導者のクロームブックの画面で児童の考えを把握することができる場所である。児童の困り感や考えのつまずき，考えのつながり等を把握す

ることで、一人一人の児童に合った学習支援ができるようにしていく。

昨年度の反省から、「情報モラルやルールの徹底をしないと、指導をしてもすり抜けて使う児童が多くいる」という課題がでてきたので、出前授業なども積極的に活用して、指導を徹底させたい。また、「調べ学習でコピーしているだけで、文章を理解して、要約することはできていない」という課題も出てきたので、何のために、何を目的として chromebook を使うのかを明確にして活用することが必要である。

3 教材分析・教材研究の充実

子どもの学びを充実させるためには、まず指導者の確かな教材分析と、子どもの主体性を引き出し、学び合いを生み出す教材研究が重要である。

教材分析では、数学的事象を正確に捉えることが大切である。系統性や子どもたちに身につけさせるべき知識・技能、指導の重点などを整理するほか、その事象がもつ数学的な仕組みやおもしろさなどを指導者が見いだすことが必要である。

データ保管できる教材・教具（ワークシート・オクリンク・フォーム等）を保管する場所を全体で統一したので、それらの教材も活用していきたい。また、すくすくの児童は、同じ学年内でも学力差が大きいので、それぞれの教材を準備する必要がある。

4 めあての焦点化

本時の学習の目標やつきたい力を子どもの言葉に置き換え、具体化したものが「めあて」である。ゴールが分かるような「めあて」を子どもと共に作っていくことが理想である。子どもの反応を具体的に予想し、「どのような『数学的な見方・考え方』を使って問題を解いていくのか」単元を通して、系統性を考え、より深く教材研究をする必要がある。「なぜ」「どうして」等、児童の問いや課題がめあてにつながるような、導入や授業展開にしたい。また、学習内容によっては、子どもたちからめあてを引き出せるとよい。

5 主体的な学びを生み出す学習課題・学習問題の設定

教材研究の中で、学習課題や問題づくりに取り組む。その際、子どもたちの主体的な問題解決を生み出すものにしたい。子どもたちが思わず考えたいくなるような場面や解決したいと思えるような問題を教師が設定していく。

6 「算数のきまり」につながる数学的活動

数学的な活動とは、子どもたちが目的意識をもって主体的に取り組む算数にかかわりのある様々な活動である。具体物を操作したり、日常の事象を観察したり、子どもにとって身近な算数の問題を解決したりするなどの具体的な体験を伴う学習をさす。

「算数のきまり」とは、算数の定義・約束をもとに見つけた性質のことである。「数理的な処理のよさ」については、有用性、簡潔性、一般性、正確性、能率性、発展性、美しさなどがあげられており、1時間の授業で学習する内容に必ず含まれる。このような性質を「算数のきまり」と呼び、子ども自身が本時の「算数のきまり」を見つけたいという実感がもてるような授業を展開する。

言葉や数字に注目して考えるために、低学年ではキーワードや数字に印をつけたり、色分けをしたりすることも必要である。学習済みの「算数のきまり」を活用できていないという課題も見えてきたので、既習学習をカードにまとめて教室に掲示するなど、常に学習を振り返ることができる環境づくりを意識したい。また、授業の導入に前時の学習を簡単に復習したりするなど、学習の連続を子ども達にも意識させる。教師も学習のつながりを意識した指導計画や授業づくり、既習内容との関連を整理するように意識したい。

7 学習形態の工夫

対話的・協働的に学習に取り組めるように、活動させる意図やねらいを明確にして、ペアやグループ等、少人数での学習形態を取り入れる。ペア・グループ学習の中で、伝え合い、学びあう場を設定し、低学力の児童のわからない等の困り感を明らかにし、その困り感を共有することで、

協働的な学習につなげていく。ペア学習を取り入れるタイミングや話し合う時間は、児童の実態に合わせて適宜考慮する必要がある。また、ITを活用した少人数指導や習熟度別学習の活用については、昨年度の成果と課題を踏まえ、今年度も引き続きその検証を進めていくこととする。

8 ノート指導や板書の方法について

ノート指導や板書の方法など、授業づくりの土台を共有し研究を進めていきたい。土台を共有して授業づくりを進めることで、学年や指導者が変わることによる子どもたちへの不安や負担を軽減することが期待できるほか、指導者の立場としても毎年、初期指導をする時間が短縮できる。一方でこうした共通事項をマニュアル化するのではなく、研究を進める中で見直しをはかり、学び合う子どもの姿につながるものとなるよう、吟味・検討を重ねたい。また、昨年度は、good note キャンペーンを行ったことで、友達のノートに興味・関心を持っている児童が見られた。教員自身もノート指導をさらに意識するようになったので、今年度も行いたい。

9 「振り返り」の意義を見直す

昨年度の反省から、授業の時間配分の甘さから、「振り返り」の時間がとれないこともあった。「振り返り」は何のために行うのか、指導者自身がもう一度再確認し、意識して授業を行っていく必要がある。そして、子どもが自分の学びを客観的にみて「振り返り」を継続的に行うことで自己の成長を感じ意欲が高まるように、さらに次へとつながる意欲になるように、研究を深めていく必要がある。

10 学びをささえる言葉の力の育成（語彙・用語）

子どもたちの表現が、限られた言葉ではなく、多様な語彙を用いたものになるように指導を進める。また、聴き手には言葉や表現を的確に受け取る力を育む必要がある。そのために、日常のコミュニケーション、言語活動をささえる語彙、思考を進めるために必要な用語や方法の指導を進める。あわせて、子どもたちが表現する場を積極的に取り入れ、子どもたちの言葉の力、表現する力を育む。特に、表現力を高めるためにも、算数的用語（長い、短い、多い、少ない、十の位、一の位など）を確実に覚える必要がある。そのためにも、教師が算数的用語を意識して児童に指導することが大切である。

1.1 学習を継続して取り組む力、粘り強さ

授業の中で思考する時間を確保したり、すぐにあきらめない子を育てたりしたい。教師自身も粘り強く向き合う必要がある。

→何でもかんでも教師が喋ってしまわない。考える子を育成する。

→そのための授業づくりを考える。

→自力解決する力を育む。そのための基礎学力の定着。

1.2 豊かな数量感覚、文章の読解力、想像力

数量感覚や、読解力、想像力が乏しい児童が多いように感じる。そこで、継続的に計算カードを活用したり、文章から場面を想像させたりする。絵図、だんご図、テープ図、線分図といった視覚化と見える化の工夫も行いたい。これらを積極的に取り入れ、子どもも自分のノートに書き記すことができるようにしていく。「きまりを類推する」「比べる」「単純化する」「作ってみる」・・・といった数学的な活動を充実する。また、問題文の読み込み・話型をもとにした説明を低学年から行っていくことも必要である。

1.3 つけたい力の整理

・基礎学力の定着

→かわっ子タイム、スペシャルサマー等の補充学習の充実。

→取組内容を学年で統一していくことで、学年全体の学力の傾向やつまづきを把握できる。

→宿題のチェック、宿題の出し方。子どもにあったものになっているか。

1年生の保護者は結構見てくれている。保護者の協力が必要。懇談会・通信等でやり方のお知

らせ。

家庭学習についてのお知らせ。算数寺子屋プリントの裏に簡単な問題をさせていくとよい。

→「学Vivaセット」,「ワークシート」の活用。

・学力差が大きい

→C・D層の子ども達の引き上げ。(習熟度別学習の活用)

→つまづきを分析する。どこで困り感を抱いているか、そのためにどういった指導が適切かを考える。

→子どもが子どもに教える場面を意図的につくる。子ども同士が学び合うことで力がつく。

・算数科における「書く力」「発表する力」「説明する力」「まとめる力」「判断する力」「考える力」、といった「思考力・表現力・判断力」の育成

・算数用語辞典の活用→今年度も活用していく。

(3) 研究の方法・計画

1 一人ひとりが自分の考えをもち、伝え合い、学び合う授業についての研究(算数科)

研究授業を中心に進める

○全体研修会 低・中・高学年で(全3回)、事前事後の検討会を全体でもつこととする。

2 研究授業について

- ・算数科を研修の中心教科に据え研修を深めていきたい。(系統的な指導・学力の向上に繋げる授業)
- ・算数3本(各学年部1本),人権1本,国語2本,6本の公開授業
- ・研究授業を行う学年については,代表者が指導案を作成する。相担任は本時案のみを作成し事前公開する。
- ・**すくすく学級は生活単元学習か,算数・国語で全体研を行う。**
- ・指導主事の先生はできるだけ呼んでいきたい。
- ・2学期に研究授業が偏るので,実施時期をもう少し分散したい。
- ・できれば1学期に1本は授業を公開したい。そこで研修の方向性を示し,全職員で研修の方向性についての共通理解を図る。公開する場合(1学期は行事等で忙しい)は,指導案は略案程度でもOK。
- ・完結するきれいな授業を目指すのではなく,少し冒険がある授業も必要。
- ・できるようになることも大切だが,子どもの思考の過程を授業で見る。
- ・子どもが悩み,考え,もがきながら課題に向き合う姿やそこでの教師の働きかけ等も研修材料となる。
- ・学年の課題(弱み)を考慮して領域を決める。
- ・公開1週間前を目安に,指導案事前説明会を行う。事前説明会では,学年の取り組みなどについての説明を受け,子どもの実態,授業のねらい,子どもたちにつけたい力などについて共通理解を深め,授業の参観に臨むこととする。
- ・提案授業の参観について・・・参観者は児童に声をかけない。
- ・全体研は全員が参観する。部内研は学年部の先生は必ず参観する。先行授業に関しては,任意とする。(学年または学年部でどのように参観するか相談する。)
- ・研究授業当日の役割分担(記録・写真撮影・ビデオ等)は,それぞれの学年・学年部の中で協力して行うこととする。
- ・**指導案の形式を統一し,授業展開等共通性をもたせる。(算数科)**
- ・事後検討会にはよい点や課題等を付箋に記入して臨む。
- ・事後検討会は必要に応じて話し合いの形態を工夫する。

3 校内研修について

原則第4水曜日を校内研修の日と設定し,年間を通して算数科の授業研究及び今日的な教育課題の解決へ向けた校内の研修を実施していくこととする。研究授業の開催日等については,授業

提案学年の意思を第一に考え、水曜日以外の日程においても授業日を設定することとする。尚、水曜日以外の日程で研究授業が実施される場合は、その日を水曜日課の5限授業日と設定し、放課後に事後検討会を実施する。

また今年度も昨年度に引き続き、校内研修とは別枠でミニ研修会を実施していく。研修内容は、算数科に限らず、教職員の授業力向上につながる内容とし、学級経営に関するもの、特別支援教育に関する内容等、幅広く取り扱うものとする。

4 年間研修計画

一 学 期	4月3日(月)	ミニ研修会①	自分の授業をふり返ろう
	4月7日(金)	ミニ研修会②	エビペンの仕方について
	4月12日(水)	第1回校内研修会	校内研修で大切にしたいこと・算数辞典について・研究主題の設定と研修の方向性について
	4月12日(水)	ミニ研修会③	個別の指導計画について
	4月26日(水)	第2回校内研修会	授業力の向上について
	5月19日(金)	第3回校内研修会	学調・みえスタの採点
	5月24日(水)	第4回校内研修会	指導案の書き方・研究授業事後検討会について
	6月21日(水) 7月27日(木)	第5回校内研修会 第6回校内研修会	研究授業2年2組算数「3けたの数」 学調・みえスタの分析の還流・授業改善について
二 学 期	研究授業算数 研究授業算数 人権公開授業 研究授業国語		
三 学 期	研究授業国語		
	1月24日(水)	第10回校内研修会	各学年の成果と課題、本校児童の強み・弱み、「条件に沿って書く」活動の交流
	2月8日(木) 2月21日(水)	第11回校内研修会 第12回校内研修会	みえスタディ・チェックの採点 研修のまとめ 来年度へ向けて